



特250
94

勿來史蹟の顯彰

勿來神社創建發願人



始



特250
94

義家朝臣の史蹟顯彰に就て

勿來古關址の修理とその光揚

源義家朝臣は、勅命を奉じて父頼義と共に、前後十數年の勞苦を積み、奥羽を平定して、治く王化を布き、絶倫の武勇と、偉大なる徳化を以て、政を正し民を撫したる顯績は、今も猶東北諸州の欽仰して措かざる所。その軍役の途次、偶ま勿來の關に落る花を惜みたる一首の名歌は、芳を千載に傳へて、その人品風格を偲ばしむ。おもふに朝臣一代の功業は主として奥羽平定に在り。而して勿來の一詠は、麗はしく之を結論したるものにして一代の點睛と爲すに足るべし。是を以て予往年此古蹟の荒廢を復興し、兼て朝臣の遺徳流風を讃揚して、民風向上の一助と爲さんと

志し、櫻樹を繼植し、山容を理し碑を勒して、その史蹟を顯彰せしに、郷人之を義として、相争て工を助け、終に去る大正十四年四月十九日盛んなる顯彰式を山上に舉行したりき。式中に舞樂「陪臚」を奏して朝臣の靈に供養す。若槻内務大臣、岡田文部大臣、香坂福島縣知事、各々懇篤の祝辭を寄せて擧を壯にす。予は式後山上に於て、左に録する一場の演説を爲す。聽衆無慮三萬餘、聲の達せざるを恐れて、壇上壇下群衆の間を縫ひ、且つ歩し且つ語ることに一時間半。石川記者予を逐ふて之を録するに一語をも漏さず。眞に善くその當時を彷彿せり。

夫れ義家朝臣の功業遺烈は、洵に國民の良範たり。之を追慕顯彰するは、往を鑑し來を契むる所以にして、又國家は常に歴史の中に活くるの義を明かにする所以なり。名所としての勿來、古蹟としての勿來、今や

略其の體容を具へたり。更に魂魄を入れて、史蹟を光揚せざるべからず。即ち「勿來神社」を創建して、永く朝臣の英靈を祀り、國家の同契を合せ、郷土の崇信を聚めて、靈的名境を現出し、以て史蹟に點情せざるべからず。予之を倡導して先づ該地の有志に諮る。咸欣々然として之を賛し、尋てこれが創建の準備に入らんとす。仍て今史蹟顯彰式當時の演説を再録して、事の由て起る所を明かにせんとす。

昭和四年六月

勿來神社建設本願人

田中巴之助

敬白

模範國民としての義家を憶ふ

大正十四年四月十九日、奥州勿來山上に於て

田中巴之助

本日は此勿來の遺蹟顯彰の式典につきまして、内務・文部兩大臣の祝辭も戴きました、又本縣知事閣下よりも懇篤なる祝辭の御朗讀を賜はりました、自分は此事業の願主としてはなほだ感謝に堪へないのであります、尚ほ又この史蹟顯彰につきましては、特に當地方の人々の偉大なる助力によりまして、此荒蕪を極めたる遺蹟もたちまちの間に或は道路をひらき、或はこの園地を整理し、樹を植ゑ、又は大石を運ぶ等のことをば、多數の人が参加せられて、快くこの仕事を短時日の間に爲し遂げまして、恰も今日は此晴朗たる天氣のもとに、斯く殆ど數萬の義衆がともに楯よろこんで此史蹟をさかんにしたことは、當地の一大名勝としての發展上有利なるのみならず、國家の歴史の上に於いて、後世子々孫々にこの國史の美を顯揚したければならぬといふ意義を徹底することに於いて、はなはだ宜しきを得たものと満足に堪へない次第であります。

今日はこの山の上で話をするのでありますから、細かい話はとて来ません、且つ非常な群衆でもあります、私は數日來準備のために十分餘を要して居つて、十分音聲が届かないだらうと思ひますから、これから或ひは此壇を下り、諸君の方へ叫かけて行つて話すかも知れません。

大體この義家朝臣の勿來の遺蹟をば斯のごとく自分が顯彰しなければならぬといふ主意はどういふ所に在るか、といふ大要を話さぬといふと、私は義家公の遠孫に當つて居るから、自分のたゞさういふ緣故でやつたといふのみに解されてははなはだ困る、これは義家といふ人格を通して理想の日本人を讃歎し光揚するといふことが、この遺蹟顯彰の主意であります。(拍手)

そもく日本といふ國は、此國を開かれた御先祖が神武天皇である、神武天皇は御尊號の示すがごとく、「神聖なる武」の御徳を有たれた方としてある、今日世界一統に所謂「文化」といふことをさかんに唱へるがために、往々軍國主義とか或は武斷の政治とかいふことをば悪くいふやうな風潮があります、それは人を壓倒してみづからの利をなさうといふやうな意味の「武」は、無論文化の敵であります、然し日本の神武天皇の理想せられた「武」はさういふ武ではない、御稱號の示すがごとく「神武」といふのは「神聖なる武」である、この神聖なる武といふのは何であるか、神聖なる武そのもの裏面には「神聖なる文」といふものを含んで居るのである、神聖なる文を蹴却した武は眞の武でない、日本は御先祖が神武天皇であるから日本人は強い、みな武勇の民である、然しながら、その武勇といふものは單に他を壓迫するところの強さではない。

畢竟「武」といふものは、正義をまもるといふとに就て入用なものである。人を殺すところのものではない、戦争に人を殺すけれども、夫は已むことを得ずして殺すのである。眞の武といふものは人を助けるのである、かるが故に武の内面には「あはれみ」といふものがなければならぬ、その仁慈の心の無い武は眞の武でない、たゞひ人間が持つて居る武であつても、それは禽獸の武と一般である。(拍手)

虎には爪がある、牙がある、狼には牙がある、牛にも角がある、斯やうな禽獸には、人間をおそれしめるほどの武器を持つて居る、これは彼等の武である、それはたゞ己れが食物を得ようがために、他を壓迫して、他を殘害して、さうして我が望みを達しようといふために、使ふところの武である、若し人間が單に利害の問題とか、己れの領土を擲げるとか、我が國の商權や利權を保護するために他を壓迫するといふ、これまゝ永らくの間續いて居つた世界のあらゆる戦争のごとき事が人間の武であるならば、それは虎や狼の武と同じことである。

神武天皇は絕對平和といふことを御主張になつた、双に軋らすして天下を平げんと仰せられた、さういふ武である、それが日本の國の使命である、かるが故に其の文の中には武を含み、武の中には文を含んで居る日本では人皇の世となつて、神武天皇は武徳の御先祖であると同時に、「久米舞」「久米歌」といふやうな日本最古の文藝はやはり神武天皇によつて建創せられた、其の優美なる文藝の上に發揮した武は絕對平和のために働く武である、日本人の心はみな此の心でなければならぬ、「武門武士」といつて「さむらひ」といふも

のが別に何か一種の特別な職業となつた誤れる國家の組織が、今日の國民に甚だしき誤解を興へたけれども、元來日本は、天皇陛下と人民との二階級より外にないのである。(拍手)たゞ其の人民の中で勳功のある者が華族とか貴族とかなつた、これはやはり人民である。

その天皇と人民といふのはどういふ關係かといふと、この建國の精神、即ち天照太神がこの日本を選ばれて地上に此一大文明國を建てられた、一番ふかく、一番高いところの文化をば地上に建てられた、それをば「天津日嗣」といふ、「日本書紀」には「天業」といつてある、その天業の内容は神武天皇がこれを三通りに説かれてある。「積慶」といひ「重暉」といひ「養正」といふ三つを以て此日本の國を建てた三綱とせられてある。「積慶」とはもろくの道徳、仁慈を積むことである、「重暉」とは天地人の三才を貫いたるところの人間の文化である、即ち知識である、それを重ねるといふ、その目的は何であるかといへば、正義をまもるためである、正義といふのは何であるかといふと神の心だ、或は佛の心と言つてもよい、人間を平等にみな悉く正しき道に入れようといふことのために、如来や聖人も出た、然しながら如来や聖人はこれを或は思想となし、信仰となし、説明とはなした、けれども之を事實としたものは、國家の建設によつた正義でなければならぬ(拍手)、即ち日本はその正義を行ふために國といふものを拵へて、國といふものゝ全部を正義にしたのである、だから日本といふ國は正義のかたまりである、その正義のかたまり、正義の結晶したのが日本といふ國だ、その國の心を傳へるのが國民でなければならぬ(拍手)、それをまもるのが、天皇陛下

下である、だからこの二階級しかない、この國は即ち「神武」を以つて君となす、人民もまた「神武」でなければならぬ、神聖なる武でなければならぬ、それを武は軍人のやることであつて、吾々平民の關係のない事と言ふたらば大變に間違ひだ、農家は鎌を執つても、その鎌の中にこの武がなければならぬ、(拍手)商人は算盤を持つても、その算盤の中に正しき武がなければならぬ、(拍手)、學者はペンを走らせる、そのペンの中にこの正しき武がなければならぬ(拍手)、その註文と違つたのは即ち日本の本當の日本人ぢやない、本當の日本人はこの心をば自分々の職業なり分限なりの上に顯すのが眞の日本國民である。

ところが政治家がこの心を忘れたり、學者や教育家もこの心を忘れたり、實業家がこの心を忘れたりしてたゞ西洋人の精粕を喰つて、あらゆる世界中で詭めつくしたかすを善いことに考へて、その尻馬に乗つてたゞ彼等の眞似をして、折角かたく正しい日本の國風美を破壊して己れと稱つた穴の中に墮らるゝことも知らないで「文化々々」と言つてみた穴の中に落つちてしまふ、(笑、拍手)今日の世の中の有様を見るがい、労働者は労働者でもつてたゞ資本家と對抗して争ふことを以つて能事として居る、小作人は地主に對して争ふことを以つて能事とする、人民は政府と争ふことを以つて能事とする、議會の有様を見ても知れ、(拍手)議員同志でさへも年中喧嘩をして居る、わるく言へば打つたり叩いたりして居る、亂暴狼藉として惡態を吐いたり打つたりする者は、昔から馬方か車力の喧嘩たと言つて居る(笑)、ところが一國の選良として集まつて、上、天皇の聖旨を奉じ、國民の安危に關するところの重大なる國政を議するところの立派な大道

場にて、罵詈雑言はおろかのこと、果ては殴り合をして負傷者までも出かすといふやうな、實に最劣等な風俗が今議會に公然と行はれて、打つたとか殴つたとか、癪が出来たとか傷したとか(笑)その跡始末でもつて幾日もくゝいろくゝのことをやつて、懲罰會議だとか、打つたとか、打たないとか、そんなことで日を暮して居る、一國の模範たるべきところの最高議政の府に於てすらこの通りであるといふことは、國家の全體が争ふことを以て能事とするといふ反映である、即ち西洋の状態と今私が言つたこの反抗闘争の氣分を宜い氣になつて引き入れた結果である(拍手)、といふのは日本は階級はあつても争ひといふものが無いのだ、階級があればあるほど世の中は整然とするのが日本の特色だ(拍手)、それを利いた風に西洋人の眞似をして、たゞ何でも長者に向つて反抗しさへすれば立派なことのやうに考へて居るといふやうな淺はかな風俗が、今日政治界といはず教育界といはず實業界といはず、滔々としてこの惡風が瀾漫して居るといふことは、みなこの日本の國體、國性を忘れたから來つたのである。

この頃よく國家を改造するナンと言ふけれども、改造しなくても宜いのだ、改造ナンで餘計なことだ、改造するナンと言ふことは生意氣千萬だ、回復するのだ、神武天皇に還るのだ(拍手)、神武天皇といふ天子は、世界に於て一番立派な武徳のあるところの君であると同時に、神のごとき絶對の平和を地上に移してこの世界人類に向つて人間界へ最上級の平和の福音を二千五百有餘年の昔に宣言せられたのである、そのことをば、日本の歴史家も政治家も今までボンヤリして居たぢやないか、己れの國を忘れ、己れの先祖を忘れ

己れの天子を忘れ、己れを忘れて居つたのだ(拍手)、それだから日本の状態がこんなになるのだ。殆どさまのない姿だ、これを見て憤慨せぬ奴は日本人ぢやない(拍手)。それで吾々はこの日本の國體、國性を十分に體驗し發揮したところの眞の日本人の模範を求めなければならぬ、それは何であるか、吾々は一個人々々々すべてがあらゆる仕事、すなはち學問にも、教育にも、實業にも、悉くこの精神が行渡つて居らんければならぬのである。商人の眞實、農家の誠の中にもこの神武天皇の精神が行渡つて居なければ日本人でないのである。ところが今の日本はそれを忘れて了つて、今日こんな病態になつて居る、これは議會ばかり責められない、學校でもつて生徒が校長や教師を打つといふ世の中ぢやないか、教はる者が教へる者を打つといふやうな世界ぢやないか、これは世の中の精神界の身代限りだ(拍手)。これは只事ではない全く日本の眞の精神といふものを閉却したために斯うなつたのだ、然らば完全なる模範の國民に還らんければならぬ、即ち神武天皇の精神に立還つたところの國民を造り上げなければならぬ、改造ではない、回復である、復古である(拍手)。

そこで其の模範を求める場合に、古今の歴史に於いて一番完全な、日本人らしい日本人がこの入幡太郎義家だ。殆ど源家累代の光榮を一身に築き上げたところのこの武勳赫々たる義家は、神武天皇を人民にした國民の模範的人格である、義家が春風三月、落花の天に凱旋の將軍としてこの勿來の關を通られて——其の當時は此山に山櫻が一パイあつた、その春風に落る花を見て詠じたのが有名な「吹く風を勿來の關」のあの

歌だ、それがツイ其の前までは奥羽の山野に於て賊軍長驅して安倍の一族を征討した、鬼神のごとき勇武の將軍と言はれた強い人だ。古往今來我が國の武將で義家くらの完全に強と言はれた人はあまり無い、義家も強かつたけれども、一面に於ては猪武者と言はれた、けれども義家は其の強さに於ても眞に完全な武將と言はれた人である。その極めて強い義家の肚裏から斯ういふ優美な歌が出るといふ所を考へて見なければならぬ(拍手)。種のない手品は使へないぢやないか(笑)、強といふ力をこの腕に持つて居たならば、この左の腕には何があるかと考へて見なければならぬ、それは義家の持つた武徳といふものゝ底を流れて居るところの、日本の文化の淵源たる忠孝の美性といふもの、即ち國體精神といふものが充實して居るから、それが發しては武となり、開いては文となり、この文武双備の大人格が出来上つたのである。けれども義家だけが特別に偉いといふのではない、あらゆる國民は皆な義家の通りでなければならぬ(拍手)。

そこで私は此義家の人格を通して、日本人の固有の國民性といふものをば今に於て追懐して、その本に歸るところの準備をせんければならぬ。神武天皇に還ることが直ぐさま出来ないならば、先づ取敢す義家までには還らんければならぬ。斯ういふのである。今日此の處に於て吾々は東京の方面から十勢の人をつれて来て、さうして斯ういふ水一滴もない不自由な所にいろ／＼な物を持つて来て、或は舞樂やヤツたり、儀式をしたり、櫻を植ゑ、碑を建てる、これは物好きでヤツたんではない(拍手)、此の勿來の關と吾々は何等關係がない、義家は私の先祖であるけれども、先祖であるからと言つて一々こんな事をして居た日にはたまた

ない(笑)、それは自分が義家の子孫であるが故に、親分の寵を擔ぐやうな意味でやつたのではない(笑、拍手)。義家といふこの完全な人格をば標榜して、これこそ日本の模範國民である、それからこの勿來の勝地が、今までは殆ど世に顧みられなかつたけれども、然し此處に来て見るといふと、一方には海を見、一方には遠山を見、如何にも風光明媚の地である、さうして古は此處に櫻が非常にドツサリあつた、この「名所」に櫻といふ「名花」があつた、智仁勇兼備の「名將」が「吹く風を勿來の驤」の「名歌」を詠んだ、彼の勇武鬼神を壓するほどの偉い強い人が、その金甲鐵腕の中から斯ういふやさしい歌を詠み得たといふことを主題として、一つの謎として考へて見なければならぬ、それは神武天皇が壓の神と仰がれたほどの強いお方であるに拘らず戦争のふる毎に久米歌を作つて、久米部をして久米舞を舞はしめて、さうして軍民をお稽ひになつたといふこの優しい仁慈の御心ばへ、今に傳はつて居る久米舞の如き高雅優美な文藝、それは殆ど世界に於て最も古い整うた文藝を有して居られた神武天皇は、敵が恐れて壓の神と言つたといふほど強いお方である、さういふ優しさを有して居るところの、文藝の母とたるべき武が眞の武である。

仍つて先づ義家の性格から推してこれを考へたい、第一に義家は敏神の觀念の非常に強かつた人である、敏九年後三年の役に於いて、その當時の所謂蝦夷といふものは今のやうに開けたところではない、蠻族がこれに棲んで居つた、その蠻族の棲んで居つた蕃地に至つて王化を布かうといふには、單に弓矢の力ばかりを以つて壓倒すべきではないといふ考から、日本の宗廟たる入幡大神をば戰地に悉く勸請した、五里こ

とに一社を建て、勸請した、これを「五里入幡」といふ、今も各地に残つてゐる。

敏軍長驅して敵地に入つて敵を鎮壓するのに、先づその宗廟の神を祀つて敏神の意義を知らしめるといふほど、即ち持久戰だ、斯ういふ仁慈の感化を及ぼして國民を指導しようといふ用意の周到綿密にして、甚だ優しい、斯ういふところから鬼神のごとき勇武も自然にあらはれて來るのである、彼は鎮守府將軍として武將であると同時に、陣奥出羽守として政治家でもあつた、その政治には、人民が父母のごとく懐いた、その武勇には鬼神のごとく恐れた、その根源には、たゞ弓矢の道に長けて居つた、文藝に長じて居つたといふだけではない、神を敬ひ王を尊ぶところの神皇王の大精神といふものが土臺となつて居つた、それから發して來た文武である、であるから或るとき天子が御病惱で、妖怪があつて天子の御惱を増すといふ時に、宿直をして「源義家此に在り」と弦を鳴したら、その妖魔が退散したと傳へられ居る、其のくらし凝結した高尚な忠義の思想を有つて居つた人である。

先づ尊王家とか愛國家とか忠臣とかいふ類の人は、歴史上いくらもある、然しながら私の特に最も尊敬すべきことは、義家が敏九年、後三年の兩役を果して美事に奥羽を平定して王化を布き了つて、この事を朝廷に申上げようといふので、敵將の首を持つて京都まで凱旋をして來、途中で、當時の廟堂の大匠か、彼を京都に入れるといふと、此の大なる勳功に對して多くの賞與を出さんければならぬ、なか／＼容易のことではない、之はモウ折角平定の功を奏して歸つて來たのだから、何とか理窟をつけて賞與を出さないやうなこ

とにしようといふので、まアその當時の大蔵大臣ともいふやうな者が呑つたれた人間でもあつたと見えて、彼政府の命に依つて戦争したのではない、私闘である、私のかひである、仍つて政府に於ては賞與するの限りでないといふと言ふた、諸君！ どうです？ この幾年といふ永い間あらゆる艱難辛苦を経て、さうして朝敵を滅ぼして了つて奥羽の地を平定して歸つて来た、現代の戦争とはわけが違ふ、自動車に乗つて、敵地へ走らして行く戦争とはまるで違ふ、一涌りならぬ艱難苦闘を経て立派に美事に平定の功を奏した、その結果が何だといふと、「それは貴様達が勝手に戦つたのだから朝廷は知らない」と言つて京都へ入らない内に停めてしまつた。

今日の人間は賞銀が足りないと言つてストライキを起して會社に迫るとか、或は市役所へ押かけるとかする、その他の官衙などでも、此の頃は長者に反抗して、大勢で徒黨を組んでギシ／＼文句を言ふといふ事がある。今言ふ通り物々教はる身分の生徒がその教訓に反抗して、甚だしきに至つては、その先生を寄つてたかツて打つて、自分等の意志に従はしめるといふやうな亂暴狼藉、天地顛倒した今日の世の中でこれを考へて見たらどうだ、義家なる者が凱旋の途中で京都へ入つてはいけないと言はれて、大勢の何萬といふ將卒それ／＼勳功を樹て、金雞勳章でも貰つて立派に故郷に歸るやうといふ人間が皆な鼻を明かされたといふやうな時に、その首領となつた義家が今の人間であつたらどうする？、必ずや大なるストライキを起すであらう(拍手)、或は政府を攻撃するとか、大蔵大臣の不信任を唱へるとかいふやうなことをやつて、ガア／＼

多勢の力を以て「我が敵は本能寺に在り」でもやり兼ねない筈のものだ、こんなバカ／＼しい非條理の事はないのである、然るにも拘らず義家はこれを聞いて一言の不平も言はずに、廟義すでに斯くのごとくん敵將の首を京都へ持つて行つても何にもならぬからといつて途中へ厚く葬つて、さうして勳功のある將士を解散するときに、朝廷からは一文の褒賞も出ないといふので、あらゆる自分の財産を抛つて、勳功のあるハマをば私の財を以つて公の勳功を賞して、一言も文句を言はずに自分は郷里に歸つた、朝廷を一言も怨まず、當局者を一言も責まず、隠忍した、あれだけの強い人、あれだけの人望を得た人——天子の命は肯かなくとも將軍の命は必ず肯かと言はれたほどの人望家であつた義家が、何等一言の苦情も哀願も言はないで、枚を叩んで靜かに故郷へ去つたといふ、この精神は何から出て居るか(拍手)これが彼の五里毎に入幡の社を勧請して、さうして當時の蠻民を感化しようといふ深慮、その淵源は正しく國體精神から發はれて居る、これが眞の武勇であり、これが本當の忠君愛國の標本だ(拍手)。

一日緩急あれば義勇公に奉ずるといふことは、日本國民性の普遍的な特性である、然しながら、何事かあつて——ちやうど火事があつた時に平素持てないやうな重い物が持てるやうなもので、何かの事變の際に人間といふものは奮發する氣になるものである、死ぬことの嫌ひた奴でも、どうかしたはづみで惚れた女があれば、心中しよつたといふこともある、それでは心中する奴は一體死ぬことの大好きな奴かと思ふとさうではない、死ぬことは大嫌ひナンだけれども、或る感情に激したときには心理作用でさうなる、一時の激變

に依つて人情がさういふ風にたつたといふやうな、煙花の香みたるやうな浮いた忠君愛國ではいけない、今の義家のやうに武勳赫赫功名太陽のごとく輝いたといふ大得意の凱旋將軍が、途中でもって「貴族勝手にやつたんだから入つて来るな」と言はれて、不平を起さないのみならず、私の財産を盡してこの數萬の將士に朝廷に成り代つて賞與を興へて、一言たりとも褒賞を朝廷に求めず、怨みを言はずして、靜かにして世の太平をはかつたといふ、その餘風餘徳が後年源氏の命ならばいつでも一命を差出すといふ、この東國全體が源氏に人望の聚まつた原因となつたのであるけれども、それはさういふ事を謀つてやつたのではない、斯うして置けば後世子孫が榮えるであらうからと云つて、樹を種あるやうな料簡でやつたものではない、天眞爛漫眞の忠誠から現はれた、これが本當の日本人の朝廷に對し、國に對するところの眞の忠君愛國だ(拍手)、これを完全に體はしたのが義家である。

義家の徳はいろいろある、ザツと算へても「敬神」といひ、「誠忠」といひ、「武勇」といひ、「仁慈」といひ、「寛宏」といひ、「文雅」といひ、「機略」といふ、この七つは義家は完全に備へて居る、斯のごとき性格こそ、義家の天賦のすぐれた性格から來つたと言ふべきであらうか、或は何か他に修養から來つたのであらうか、無論天賦もすぐれて居つたらうけれども、私はこの義家といふ人がまことに如法に國を思ひ、常に忠義を盡すといふその根柢が、天然自然と國體精神とし、現はれた日本國民性といふもの、自然表示としての結果であると考へる(拍手)、私は嘗て、明治天皇を「國體の神化」とお呼び申した、これに従へば我が先民

義家は「國性の神化」と言ふべきである(拍手)、所謂忠孝の美しい徳が體徳と性格の上に咲き出でた國性の神化である、たゞ武徳とか武勇とかいふことだけを以て考へたのでは違ふ。

又これを武徳の旺盛な人として考へても、その所謂「武」は虎や狼が反對黨を壓迫するため、武器を有つて居るやうな意味と同一の武ではない、ナポレオンが想像し、秀吉が考へたやうな武とは違ふのだ(拍手)。神武天皇の武は天下を平定するための武である、正義をまもるための武である、國を積み、軍を重ね、正義を盡す、この三綱を以て日本の國は建てられたと仰せられた、この三綱が人類文化の出發點であつて、又發點である、これ以上の文明はない、これが天照太神によつて授けられたところの至高至上の「王道」である、この王道を「天皇無窮」といふ、その天皇無窮の王道をまもらせ給ふところの帝室を天皇無窮の「實祚」といふ、それは、天皇陛下ばかりではない、帝室ばかりではない、この道を履み行つて御先祖の通りに國民性を發揮して備光心を一にして世々厥の美を濟すところの日本の國民も亦天皇無窮でなければならぬ、であるから神聖なる「武」既に正義をまもるところの實行力、それが「武」である、その武、神化して性格としたものが「忠孝」である、斯ういふ意味の武から現はれた忠孝でなければ眞の忠孝ではない、親孝行をすると言つたつて、君に忠義をすると言つたつて、祿を賣ふから君に忠義をつくす、養つて賣つたから報酬のために親に孝行をつくす……そんな打算的の忠孝はそれは支那の忠孝だ(拍手)、日本の忠孝はそんなものではない。

よく新聞記者が言ふが、社会主義の者が跋扈する、その源は社会主義者も悪いだらうけれども、政府の官憲がむやみに壓迫するからそれの彼等の精神を激すのだと言ふ、それはさういふ事もある、けれどもあつてもそれは間違つて居るのだ、前年幸徳秋水の事件の時に、やはりさういふ議論があつたから、自分はこれに捨て置けないと思つたから「國民的反省」といふものを書いて數萬部天下に撒つて反省を促した、たとひ官憲がどうあらうとも、帝室が人民に壓迫を加へようとも、それは國民が彼れ此れ言ふべき所ではない、帝室に若しさういふ悪い事があるたら、それは帝室御自身が御先祖に對して済まないのだ(拍手)、人民はこれに對して彼れ此れ言ふべきものではない、人民は人民の道をまもつて立たなければならぬ、「君、君たらずといへども臣は以つて臣たらずんばあるべからず」、「父、父たらずといへども子は以つて子たらずんばあるべからず」、これが現代不朽の遺徳だ、親父が間違つて居るからナニ奉行などしなくても宜いとか、死んや自分の演説に對して審査が無理に叱言を言つたからといつて、そこで反抗心を起してそれを以つて朝廷に累を及ぼさうナンといふ、こんな見當違ひな話ば世の中にな、(拍手)、さういふやうなことを善い事として世の中に鼓吹するのも、一般思想界の誤りである(拍手)。

親父が、今申した通り朝廷の腐敗が私の憂ひであると言つて之を鞭斥したにも拘らず、一言の怨みも言はずに、私財を以つて國家に成り代つて勳功のある將士を賞與して、機の下の方持をして、一言たりとも怨みもしなければ功にも誇らなかつたといふ、これが本當の日本國民である、打算的に、機利的に、今日のや

うに何でも機利々々と言つて人間を機利でもつて換算しようとして考へたのは、食物本位の思想である、食物本位の思想は禽獸の思想だ、禽獸は食物を漁ふより外に何も仕事がない、人間も亦食物本位であるといふ彼のマルクスの主張するやうな議論は、人を擧げて禽獸たらしむるものである(拍手)、禽獸になつてそれで平氣で居るやうな、低級な墮落した國民を何千萬有して居つても、國はすでに亡びて居るのである(拍手)、宜しくこの國の使命を體し、建國の精神に則つて、今の義家の性格を私が七ツ算へた、「敬神」と「誠忠」と「武勇」と「仁愛」と「寛宏」と「文雅」と「機略」と、これが日本人のあらゆる階級を通じて、この七ツの徳が現れて居らんければならぬ、國民の精神は悉く皆「敬神崇祖」神を敬ひ祖先を崇めるといふ心から出認して居らなければ、どんな文藝を有して居つてもそれはいも蟲の背中のきれいなと同じことで、何の用にも立たぬ(笑、拍手、「そんなことは誰でも知つてる」評する者あり)誰も知つて居つても誰も行はないから言ふのだ(拍手)、又誰でも知つてると言ふけれども、その「知つてる」に程度がある、先祖を敬ふといつたつて、何で先祖を敬ふのか、どういふ講で先祖を敬ふのかといふことがわかつて居ない、だから「敬へく」と言はれたつて上の空で、敬ふばかりで徹底して居らぬ、「敬神」と言へば日本は神國であるといひながらそれが天照太神なり、神武天皇なりを敬ふのを忘れて居る、まア日本の大都會と、へば東京だ、日本を代表して居る大都會は東京である、その東京でツヒ此の間まで神田の明神の祭禮に、「神武天皇の花車が出ると、その次から「藤坂長蔵」の花車が出た、諸君！ 神武天皇はこの國の御先祖だ、この國を建てた人だ

さうして今の絶對平和を以つて世界人類に臨まうといふ偉大な思想信仰を人間界に發表なさつたところの神にひとしい御方だ(拍手)、その御先祖の神武天皇の後から、泥鰌の能坂長鯨の花車を引いて行つて、それでピークテン／＼とヤツて居たんぢやないか(笑 拍手)、それをヤツて居る者は解らぬからヤツて居るのだらうが、大體神官がこれを平氣で見てる、政府がこれを平氣で見てる、教育家がこれを咎めない、坊さんもこれを咎めない、泥鰌と神武天皇と一緒にしてそれで平氣で居るといふやうな低級な敬神だから、國がこんなになつたのだ(拍手)、出直しだ！出直しだ！！

敬神も崇祖も皆んな出直しだ、忠孝もその通りだ、かびの生へた忠孝などを振り廻して、壓迫的にたゞ傳統的道德でヤツて居るから、それだから西洋人からグズ／＼言はれて、今のハイカラが一忠孝亡國論「ナンて下らぬことを言ふのは、さういふ隙があるからだ、そんなかびの生へた忠孝ではいかぬ、そんな粗雑濫造の敬神崇祖ではいかぬ、國體の精神から根の生へた本當の敬神崇祖でなければならぬ(拍手)、それは近く源義家が活きた手本である。

又武勇といふことも今言ふ通り、たゞ徒らに強といふことが武勇ではない、それは蠻勇である、その「強」といふことの裏面には必ず「優しい」といふことがなければならぬ、「武士」といふものゝ内容は一情を知る」といふことに在る、「この情を知る」といふ心から出た強さでなければ本當の強さでない、彼の衣川の戦いで義家が安部貞任を追ひ詰めた、義家の矢先に當つた者はモウ千人が千人助からないといふ位な強

弓且つ弓術の名人だ、それが敵將を追ひ詰めて貞任をいよく一矢に射止めようといふ時に、あまり矢盡が美事であつたから餘裕があつた、そこで義家が貞任の背後から、ちやうど衣川の戦争であるから洒落て「衣のたてはほころびにけり」といふ即吟の歌を以てからかつた、奥州では城の砦のことを「館」といふ衣川の館だから「衣のたてはほころびにけり」と下の句をやつた、すると貞任が餘裕のあつた所を見たから振り返つて義家に向つて

「年を経しいとのみだれの苦しきに」

と上の句をつけた、義家は今やウーンと滿月のごとく弓を引き絞つて、いよく矢頃にはめてあつたに拘らず、あまりに美しい貞任の即答の名吟であつたから、さすがの義家もアツと言つて感じてその儘貞任を助け放してしまつた、どうですか？ 貞任のために永い間苦しんだのだ、貞任のために家の千郎黨もたくさん討死してゐる、それほどの強敵を今追ひ詰めて一矢に……といふ時に、「衣のたてはほころびにけり」とヤツたらば、彼もさる者「年を経しいとのみだれの苦しきに」とは附けも附けた、いかに優美にやさしい、その文雅の徳に免じて、はめた矢盡を外して命を助けたといふ、この物のあはれみの中に宿る武勇これが眞の日本神聖なる武である(拍手)。

それがこの勿來へ来てこの關を通るときに、

吹く風を勿來の關とおもへども道も狭に敷る山櫻かな

と詠まれた、今も此地に来て見れば斯く山水平嶺の地である。これに古木の櫻を配し、金甲鐵腕の名將が名馬に打ち跨がって此關を通つて、折しも吹き来る春風に花鬘が絡紛として散つたといふその風情、義家たらずといへども一種の感慨なかるべからざる所である。夫は歌よみが此處で歌を詠んだのならば何でもない、武勇絶倫の名將が凱旋の功を載めて此處を通るときに、日本の名花であるところの此の櫻花に對してこの名吟を遣した、そもくこの勿來の關といふのは古へ蝦夷の敵がこれから南へ来るなどいふので、この關國の常陸の國との境に設けられた、常陸の國は昔は「上國」といつて親王の任國になつて居つた、常陸の太守は臣下では出来ない、親王の任國となつて居つた、其くから重要視された、これは國防の要關である、さうしてこれから北の奥州の方には蝦夷が棲んで居つた、そこで此處に關を建て、永く國防の要關として、これから南へ来るなどいふので「來る勿れ」と書いて「なこそ」と謂ふ、「勿來の關」といふのは消極的の名前であるけれども、國防の意義をあらはして居る。日本の武は侵略の武ではない、正義をまもる武であるから、平生の構へは消極的でなければならぬ、國防的であつていゝ、一朝これに反抗する者があつた時には回天の威力を揮つて、世界を一呑みにしてもビクともしないといふ強さがある、ただむやみに國さへあれば毒りに行かり、機會さへあれば利權を獲得しようといふ、まるで巾着切が電車の中でキヨロくして居るやうな、さういふ外交やさういふ軍事行動は、日本國民の最も愧つべき所である、「勿來」の二字は消極的の意味に武を繼へて、眞の國防の意義をあらはして居る。

さうして今でも此處は風がよく吹くところだ、この風の吹くのは斯ういふ海岸の關係、山の關係で、私もこの熱烈風の日に此處へ櫻を植ふる番號を打ちに来てひどい目に遇つた昨日今日は幸に上天気であるが、然し今日もモツ大分風が出て居る、とにかく風の名所だ、義家の時分だつて風は吹いたから、「そこで吹く風を勿來の關とおもへども道も狭に散る山櫻かな」モウ蝦夷は平けてしまつたから來ない、風だけはせめて來てくれるなと思つて居るのにこんなに花が散るといふ、此落花を惜んだ情の中にどういふ事を感して居るか。

私はこの風が日本の伊勢の神風であるならばその神風に散らす櫻の花こそ本當の日本國民の散らすべきところの花である(拍手)、若しこの風がワラル、アルタイから吹いて來る彼の赤い風であつたならば、そんな風の爲には一瓣の花をも散らさぬといふのが日本人の特性だ(拍手喝采)

今はいろのく風が吹いて居る、亞米利加からも吹いて來る、西比利亚からも吹いて來る、支那からも吹いて來る、八方十方から日本に向つて風が吹かうとして居る、かるが故にその風を防ぐには、眞に奥州の一角に勿來の關を置かないで、日本國中のすべてに、日本人の腹の底にみな勿來の關を築かなければならぬ(拍手喝采)、さうして散るべくんば伊勢の神風に散らうとせんければならぬ、花は櫻木、人は武士といふことがある、それは士農工商といふ四つある中で武士ぐらゐ偉いものはないと考へた時代の遺物であるが然し天下皆兵、天子様は大元帥であるといふ今日の國家の組織から言へば、日本國民の全體は武士でなければ

ばならぬ、みた武士である。即ち神聖なる武を精神とした人民である、それが一朝千戈を執れば千軍萬馬を恐れぬ、眞の勇武となつて現はれる、その武が平和に就まつて居るときは 商人は算帳の上、その武をあらはし、農家は鋤鎌の上、その武をあらはす、尤も鋤鎌の上にはあらはすと云つても、鋤で人を打つて歩いては何にもならない、その精神だ、「武」は正しいことだ、正しいことをまもるのが「武」である、よつて「正」といふ字を書いてそれに「文」といふ字をかけると「武」といふ字になる、「正義」をば「干戈」を以てまもるといふことが「武」ナンであるから、人を殺すのが武ではない、殺すのは正義に反抗するから殺すのである、その罪を殺してその人を殺すのではない、それが眞の武である、その眞の武を以て立つて居るのが日本の武だ、それが日本の心だ、だから武の心でなければならぬ、そこで「敬神」、「誠忠」、「武勇」、義家のことくでなければならぬ。

「文雅」も義家のことくでなければならぬ、歌や詩をば遊興娯樂のためにするといふ低級な文雅よりも、眞の國民性を涵ふところの自然の發揮としてあらはれた尊い文藝でなければならぬ、小説でも芝居でも日本の今日はたゞ西洋の糟粕を喰つて、西洋人の眞似さへすればナンでも偉いものゝやりに思つて居る、さういふだらしない文藝によつて國民性は害されたのである、日本には固有の文藝がある(拍手)、それはその文藝の源たる固有の國體精神があるからだ(拍手)、この國體精神からあらはれた文藝、そこに根を有つた文藝でなければならぬ、即ち義家の文雅はそれから出て居る。

義家の「機略」この義家の機略を基礎とした意味で日本國民の經濟思想の模範を此に採らんければならぬ、又義家の「仁慈」「寛宏」、學を好み、士を愛する、これ等の特色が或は教育に或は學問に或は政治に、この義家の優れた七箇條の性格は、一般國民の宗教、思想、文藝、政治、經濟の上にはあらはれて行かんければならぬ、あらはるべき雪のものだ、國體精神の自覺に達り國性開發の眞の心に住したならば、いやでも皆なさういふ風にならなければならぬ。

その偉人の跡を顯彰することは、單に過ぎ去つた八百年前の義家の徳を過去のに讃歎したからと云つて何にもならぬ、國史を讃歎し、國史の美を賛美することは、七百年経つても八百年経つてもそれが新しい現在の國民の血でなければならぬ、又未來永劫にそれがますます延長し擴大して行くのでなければ、國史の美といふものは價値の無いものだ、又さうあつてこそ國民性の發展向上に資すべきものである、歴史は即ち人間の活きた血を以て書いた一つの詩である、この勿來に於て日本の名花さくら、櫻花(國日本)而して智勇兼備の名將義家の事蹟を追憶するとき、即ち武の國日本——それは神武の國日本である、神聖なる武を基礎とするといふ、少くとも我が日本國民の典型たり模範たる義家を今日の國民が追慕して、おのゝ義家のやうに否、義家以上に成らんければならぬ、神武天皇に還ること能はずんばせめては義家までには還つて、眞の忠愛國の精神をあらゆる方面から發揮充實して、國運の挽回、國運の回復を祈る、これが此勿來の遺蹟に對する私の史蹟顯彰を興した所以の主意であります(拍手)。

吾々はわざ／＼こんな不便な所まで来て、こんな仕事をするとはいふのは、ナニも名譽のためでもなければ利益のためでもない、莫大な金を使ひ莫大な努力をするといふことは、是れ皆なこの國恩、君恩を謝したてまつるために、この歴史上の美談を彰はして、せめてこれが何等か國民性の向上になれば……といふ婆心に上つて、茲にこの事業を興し、今日斯く多數の人々の賛同を蒙りて盛大にこの式を舉げたのである。さうして今日茲に特に舞臺「陪都」を奏したといふのは、義家公が非常にこの「陪都」が好きであつた、出陣の時にも凱旋の時にも必ず「陪都」を奏せしめたといふ故事がありますから、そこで本社の人々に命じて特に此の處に於いて義家公在天の靈を慰めるために「陪都」の一曲を奏して、今日の式を成した譯であります、どうか當地の諸君はこの心を以つて、ますますH本の國民性をかためるやうに、教育家なり實業家なり、あらゆる方面に於いて向上あらんことを祈ります。

私ははじめて此地へ来たときに、義家公の遺跡に有名な櫻の名所であるべきこの勿來の驛址、櫻が無いから、どういふ譯かと聞いたところが積あても皆が伐つてしまふのだといふ、何のために伐るのかといふと、薪にするのだといふ、それは無情な話だ、植る人があるのに伐る人があるといふことは甚だしい矛盾であるから、モウ植ゑた櫻は伐らぬやうにしようぢやないか、そこで私は慨然として此地に櫻を植ゑることをその時に考へたのである、さうして私は今や此地に櫻を植た、この村の青年達も非常に此のことに力をつくされた、地方の人々もこの勿來の驛地をばこれから大いに賑にしようといふ考へで、承れば「勿來保勝會」

といふものが、今度出来るさうである、恐らくは常陸の知事閣下もその總裁とか會長とかいふものになられて、この偉大なる名勝をば天下に鼓吹し宣傳して、さうしてこの驛地の湮滅を防ぐやうに、私の希望ではこの満山を櫻にして、この歴史上の古蹟を利用して、東京あたりの都人士が毎年櫻花の時分には臨時列車を出しても此地に集まつて来るほどに、瀧山を山櫻にして、人に清高の感を興ふると同時に、きよき國民性を勵發すると、この精神教育大演場ともしたいと考へる(拍手)。どうか當地の諸君は、ますますこの古蹟をばい／＼な方面から保護して、或は樹に、或は園に、或は齋路に、天下の名勝たるに恥ぢざるやうに、進んでは國家のため、退いては當地方の古蹟を壯にし美にする所以の仁俠心の發露として、その保全に十分御努力あらんことを、幸ひ本日は長官閣下も御臨席であるから、知事さんの前で私は諸君にお願をして置く、私はモウこれだけの事をしまつたら、別に此處に我が家を拵へる譯でもナンでもない、あとは諸君が此の山を嚴重に保護して、如何にも杖を曳いて見たくなるやうに、百人來たものが千人、千人のものが萬人に語り傳へて此地へ訊ねて來れるやうに、他郷から遊覽に來る人に便利を興へるやうな方法を講じて、この驛地と美蹟とをさかんに光揚せられんことを希望して已まない次第であります。(拍手大喝采)

勿來神社を建創して、義家朝臣の英靈を祀り、その偉徳高風を彰揚して、模範國民の感化を永遠に傳へんとす。予は發願人として、謹て江湖大方の共鳴賛同を仰ぐものなり。

地元各町村は、既に滿腔の至誠を以て賛同の意を表し、且つ社地の提供及び起業の聲援を寄することを約せり。事もとより重大尊嚴なるを以て、茲に先進顯達の諸名士に中央的賛同を仰ぎ、機の熟を待て、具體的宣明を爲さんとす。

發願者 田中巴之助

昭和四年六月

敬白

之を記す

執務 高知尾誠吉

同 中野浩忠

(假事務所 東京下谷豐谷 天業民報社内)

昭和四年六月四日印刷
昭和四年六月六日發行

非賣品

著作者 田中巴之助

東京市下谷區櫻木町一番地

發行者 株式會社 天業民報社

豊田傳次郎

印刷者 同所 遠山三男

印刷所 同所 天業民報社印刷部

發行所

東京・下谷・鷺谷

株式會社

天業民報社

323
242

終

